

平城京出土の新羅土器

はじめに 平城宮、平城京における発掘調査ではごく少数であるが、唐や新羅製の土器が出土している¹⁾。

ここでは、このうち、新羅土器をとりあげ、土器自体の特色、出土した遺跡、出土状態、年代など、直接資料に関わる基礎的な情報を整理するとともに、いくつかの問題点に言及し、新羅土器が出土する歴史的背景の追求に備えたい²⁾。

なお、本稿では便宜上、「平城京」は、平城宮・京を含めた総称として用い、平城宮をのぞく市街地部分は「平城京域」とよんで区別して記述を進める。

平城宮出土の新羅土器

平城宮からは2点が出土している。

平城宮東院出土新羅土器 資料 Ⅰ、図20

1965年の調査(第22次南調査)で東院石組溝から出土した³⁾。壺体部上半部の破片で、胎土は灰白色で、暗緑色の分厚い緑釉をかける。釉は内面にも及ぶ軟質の焼成。2条一組の横方向の沈線3本の間に、スタンプによる四弁花文と紡錘形文を配する。縦7.2cm×横7.7cm。

平城宮東大溝SD2700出土新羅土器 資料

1986年の調査(第125次)で、内裏東外郭の南北溝(SD2700)の第4層から出土した。第3、4層からは、天平勝宝~天平宝字年間の年紀をもつ木簡が出土している⁴⁾。陶質土器の壺口縁部の破片。口縁部外面は2条の沈線をめぐらし、頸部には「回」字状のスタンプをめぐらす。縦7.2cm×横7.6cm。

平城京域出土の新羅土器

平城京域からは以下、3カ所5個体の新羅土器の出土が報じられている。

右京八条一坊十四坪出土新羅土器 資料

1985年の調査により土坑(SK2073・SK2084)および土坑上部の包含層から、瓶形の体部から肩部にかけての同一個体に属する3片が出土した⁵⁾。SK2073では平城宮土器

の土器をともなう。土器は陶質で体部上半部には2本一組の沈線が2カ所、下半部には各1条の沈線2カ所があり、沈線をまたいで列点からなる縦長連続文(列点文)を扇状に配置する。青灰色、硬質の焼成。接合する2片の寸法は縦15.1cm×横11.3cm。



図20 平城宮東院出土新羅緑釉土器

左京九条三坊十坪出土新羅土器 資料 Ⅱ

1985年の調査で、3点の陶質の新羅土器が出土した⁶⁾。

a) 壺の体部片(資料 Ⅱ)。土器溜から8世紀後半の土器をともなって出土した。上下に縦長連続文(列点文)間に2条弧線の横長連続文と6個の珠文からなる合成文を組み合わせた瓔珞状の文様を配する。胎土は暗灰色で少し自然釉がかかっている。縦4.9cm×横4.4cm。

b) 壺の体部片(資料 Ⅱ)。横長連続文(列点文)を配する。胎土、焼成の特徴は資料 Ⅱと酷似する。九条条間小路北側溝(SD2352)から出土。SD2352からは平城宮土器 Ⅱにかけての土器が出土している。縦7.1cm×横5.7cm。

c) 扁瓶の底部から体部下半にかけての破片(資料 Ⅱ)。底部は糸切りで、体部には斜行する叩き目がのこり、残存部には印花文はみられない。井戸(SE3765)から出土した。この井戸からは平城宮土器 Ⅱにかけての土器が出土している。縦4.8cm×横10.3cm。

東堀河出土新羅土器(資料 Ⅲ)

1983年、東堀河(左京八条条間路位置)で陶質の新羅土器が出土している⁷⁾。把手をもつ壺体部上半の破片で、上から円弧文、2本1組の沈線2条の間に三角形文をとどめる。三角形文はヘラ描きによる施文である。

まとめ—平城京の新羅土器の2,3の問題

以上の平城京の新羅土器をとおしてみると、いくつかの問題がうかびあがる。

まず、土器の種類についてみると平城宮東院出土の資料①が唯一の緑釉製品であり、他はすべて陶質の土器である。緑釉土器が平城宮内に限られることは重要である。緑釉の新羅土器は、大和地域に目を広げればあいで、8世紀代の遺跡での出土は奈良県生駒郡の三ツ池遺跡のほかにはほとんど知られていない。三ツ池遺跡は、聖武天皇行幸との関連が推定されていることも参考になる⁸⁾。新羅の緑釉土器は宮殿関係遺跡との関連が深い、といえよう。

一方、大多数を占める陶質土器の出土遺跡は、資料②が平城宮東大溝出土であり、廃棄元が内裏あるいは、内裏東外郭周辺の某官衙と推定できる。この1例のほかはすべて平城京域の出土である。平城京域では、資料③が8世紀前半代の工房遺跡であり、資料④、⑤、⑥は8世紀後半の小規模宅地（16分の1町あるいは32分の1町）に関わる資料である。このような小規模宅地は一般に下級官人あるいは庶民クラスの宅地と理解されている。貴族層の宅地と推定される1町またはそれ以上の占地の宅地からの出土例がないことは注意されよう。資料⑦は、出土位置からみて東市から廃棄された可能性が高い。

なお、寺院から新羅土器の出土が知られていないことも、新羅土器と出土遺跡の性格との関連で注目しておきたい。

出土遺構の年代をめぐってはどうか。

以上のような出土遺構の年代は、一般には、新羅土器の廃棄年代の上限をしめす。資料②、④、⑤、⑥などは、出土遺構も8世紀後半であり、土器資料自体の使用年代もほぼそれに近いとみて問題がない。資料①は、詳細は未報告で、出土遺構の年代を限定する資料がなく、おおむね8世紀代のものと理解しておくにとどめる。

資料⑦に関しては、土器自体の年代は、文様の特徴からみて初期印花文の時期とみられ、おおまかに6世紀後半から7世紀前半の製作年代が想定される。したがって、東堀河への廃棄に至るまでに相当長期の伝世が想定されよう。

ところで、資料③の印花文は縦長連続文の変遷からはその衰退期にあたるものに該当する。すなわち、年代的

には、8世紀後半とみなした上記の諸例よりも後出することになる。しかし、出土遺構の年代は8世紀前半代であり、従来の年代観とは大きく齟齬をきたす。少しこの点について述べてみよう。日本出土例で資料③の類例としてあげられるのは、1983年に福岡県多々良込田遺跡第6次調査により出土した陶質の新羅土器瓶である⁹⁾。縦長連続文をジグザグにほどこすC手法により、扇形に配するなど共通点が多い。出土した溝（第4号溝）からは6世紀後半から10世紀までの幅がある須恵器・土師器が出土しており、伴出の土器により年代をしばりこむことは難しい。いずれにしても資料③の年代は今後に大きな問題を残すことになる。 （千田剛道）

註

- 1) 平城京から出土した新羅土器については、かつて、簡単な紹介をしたことがある。千田剛道「平城京の唐・統一新羅陶器」『MUSEUM』461号、1989年
- 2) 7～9世紀代の新羅土器は印花文を有することが特徴的で、宮川禎一は「新羅印花文陶器」とも呼ぶ。印花文の分類名称、変遷については、宮川禎一「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』1988年、同「新羅連結把手付骨壺の変遷」『古文化談叢』第20集（中）1989年、同『陶質土器と須恵器』（日本の美術407）至文堂、2000年を参照した。
- 3) 第22次南調査については「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1965』1965年、参照。資料は『再現された奈良の都 - 平城京展 -』（奈良国立文化財研究所監修、三越発行）1978年、『世界陶磁全集17韓国古代』小学館、1979年などで紹介された。
- 4) 奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1987年
- 5) 奈良国立文化財研究所『平城京右京一坊八条十四坪発掘調査報告』1987年
- 6) 奈良国立文化財研究所『平城京左京九条三坊十坪発掘調査報告』1986年、資料④は1986年、田辺征夫「左京九条三坊十坪出土の新羅製印花文壺」『奈良国立文化財研究所年報1986』1987年、資料⑤、⑥の写真は、『発掘30年記念 - 再現された奈良の都 - 平城京展』（図録）1989年に掲載された。
- 7) 奈良市教育委員会『平城京東市推定地の調査 - 第4次発掘調査概報 - 』1984年
- 8) 村社仁史「平群町三ツ池遺跡出土の緑釉印花文陶器」『陶説』584号、2001年、および千田剛道「日本出土の百濟・新羅緑釉」『奈良文化財研究所紀要2003』2003年。この資料は、周囲に列点をともなう水滴形文と円弧文（二重半円点文）の印花文をもち大和では飛鳥藤原地域で類例が出土している。安田龍太郎「飛鳥藤原地域出土の新羅印花文土器」『文化財論叢Ⅲ』2002年を参照。
- 9) 福岡市教育委員会『多々良込田遺跡』1985年